

1. 長岡京跡右京第909次(7ANNKN-6地区・7ANNYR-2地区)・開田遺跡発掘調査報告

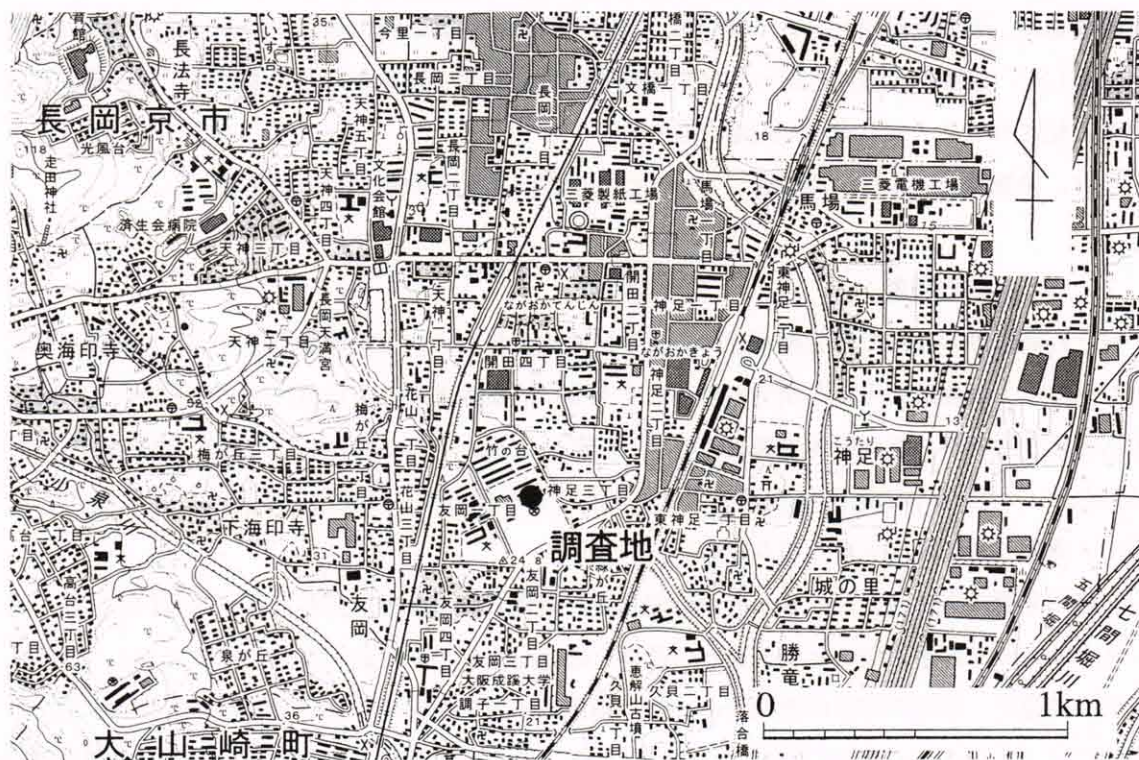
1. はじめに

今回の発掘調査は、京都府長岡京市友岡一丁目1-1に所在する、京都府立乙訓高等学校の校舍改築工事に先立ち実施した事前調査である(第1図)。

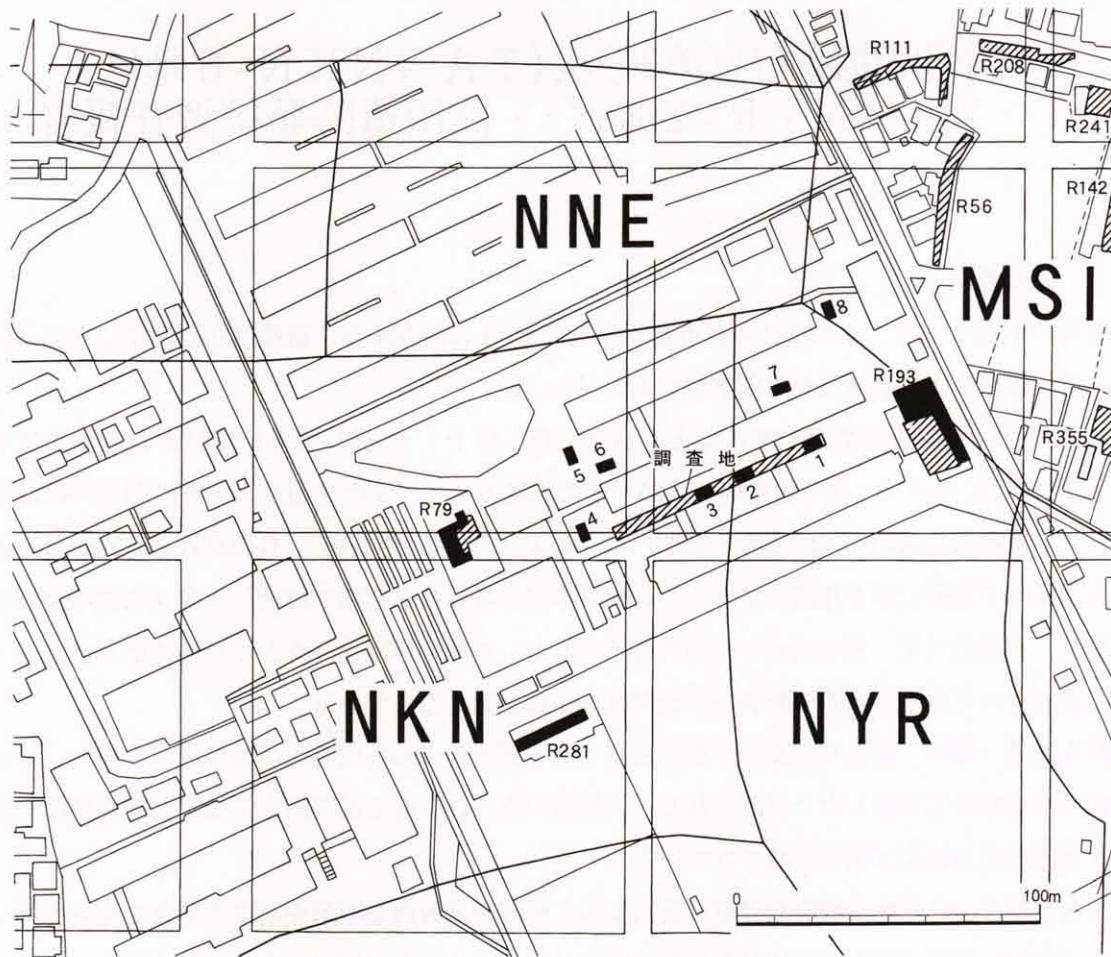
調査地は、長岡京条坊復原案に従えば右京七条二坊十・十五町(旧条坊では右京六条二坊十二・十三町)にあたり、西二坊坊間西小路が南北に縦走する。また東辺部は同時に弥生時代から近世まで断続的に続いた開田遺跡の範囲内にも含まれている(第2図)。長岡京市井ノ内から乙訓郡大山崎町下植野に至る比高差数メートル程度の河岸段丘の縁辺部に位置し、府立乙訓高等学校を挟み、その外の東・西ではかなりの比高差をもつ。西側の学園通りを距てた台地は4m以上一段と高くなっており、東側の新興住宅地帯は3m以上低くなっている。

調査地域一帯は、府立乙訓高等学校の前身である長岡競馬場造成時に西側の段丘を削り、東側の低地部を埋めて造成したと判断された。競馬場の痕跡は、府立乙訓高等学校、北側に隣接する竹の台団地等の地形に明瞭に残されている。

発掘調査は、昨年度京都府教育委員会による8か所の試掘調査の調査結果を受けて実施した。現地での調査期間は平成19年7月9日から同8月31日の約2か月間で、調査面積は250²mである。



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000 京都西南部)



第2図 調査地及び周辺の調査位置図

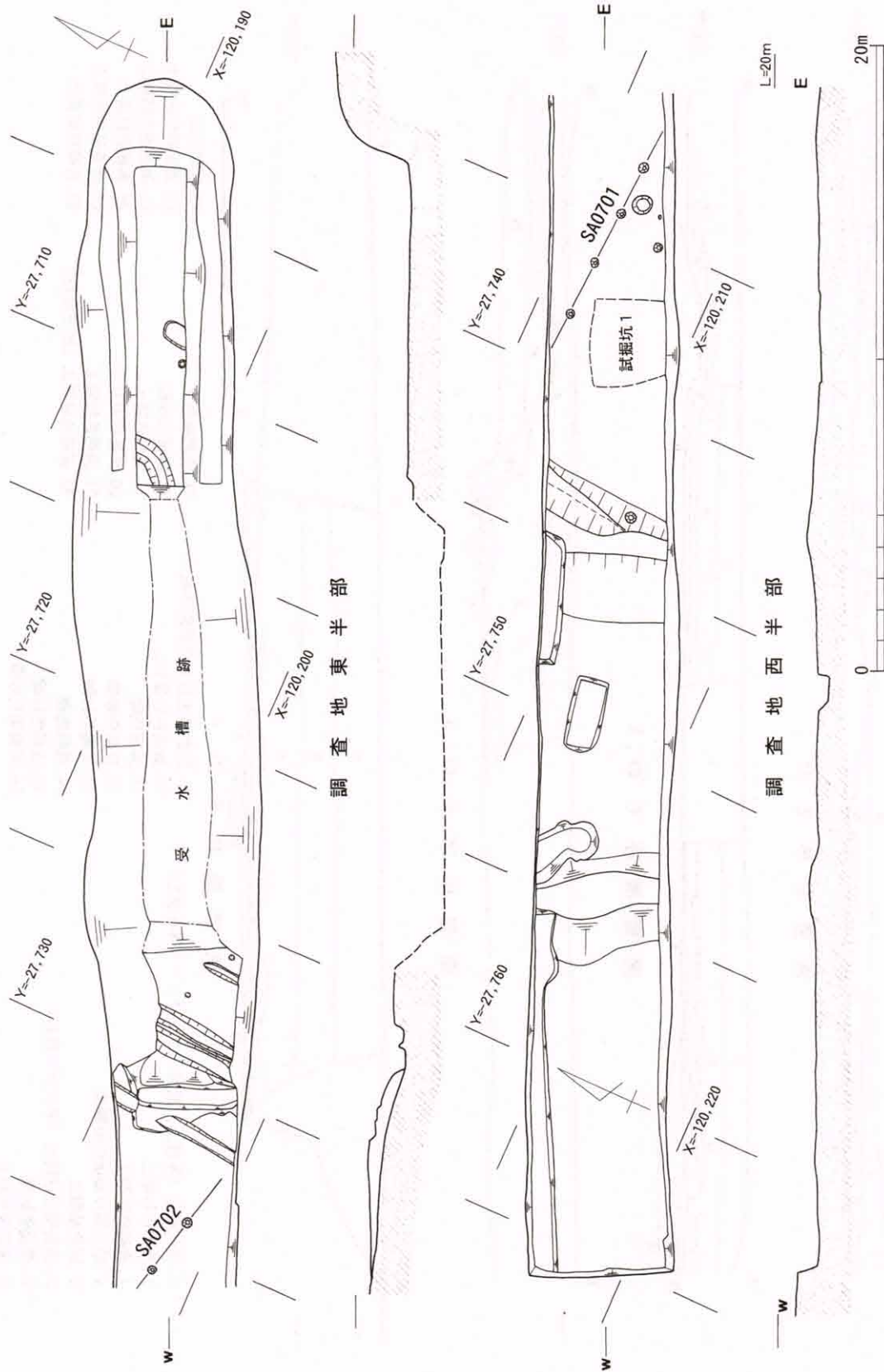
現地調査は、当調査研究センター調査第2課第1係長小池寛、同1係主任調査員松井忠春の2名が担当した。調査の実施にあたっては、京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センターより指導・援助を賜った。

なお、発掘調査にかかわる経費については、全額、京都府教育委員会が負担した。

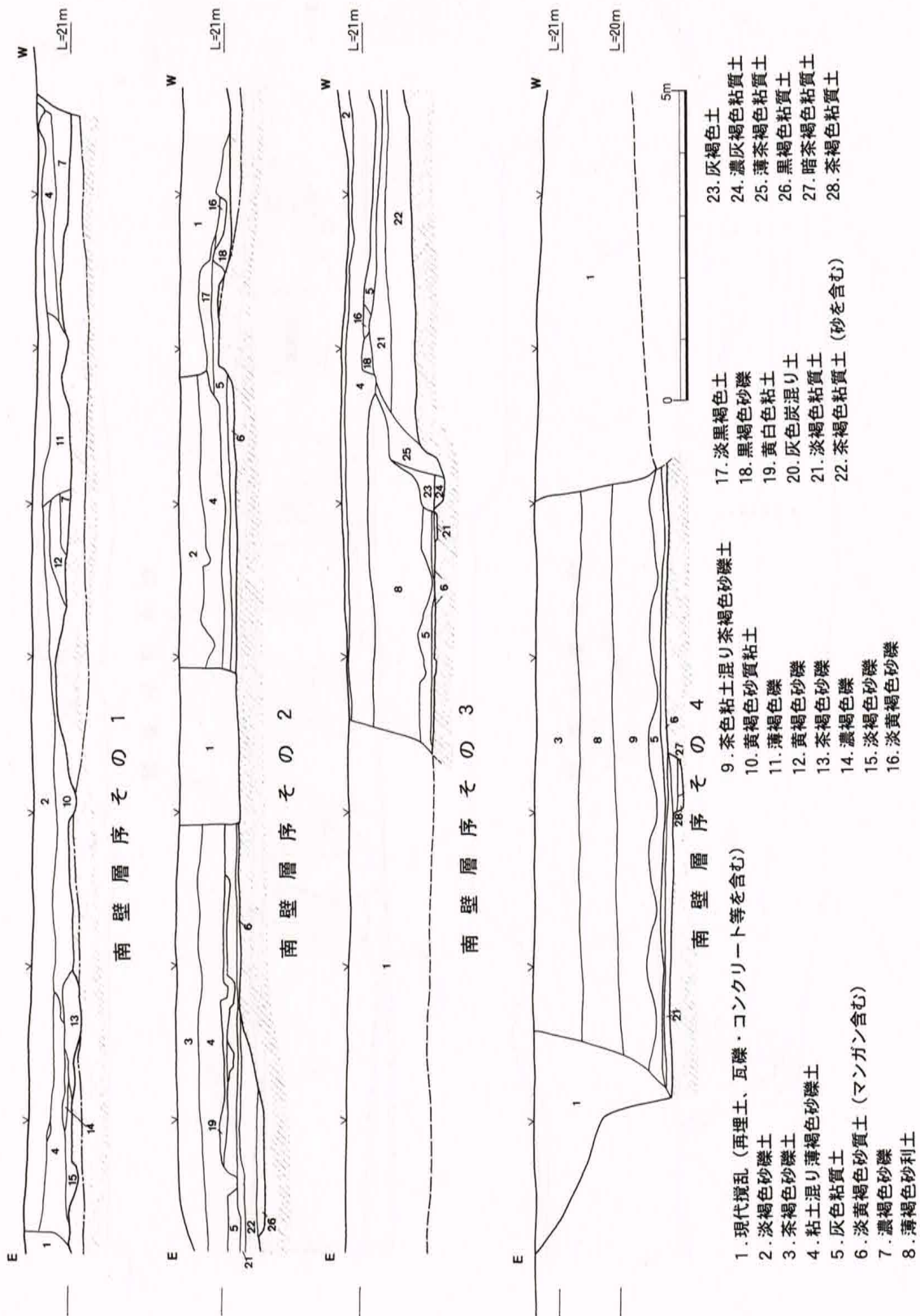
2. これまでの調査

府立乙訓高等学校内での発掘調査は過去3回実施された。右京第79次調査では、長岡競馬場のコンクリート製側溝と土抗が検出されたにすぎない。敷地東端の右京第193次調査では、3m以上ある盛土層下から長岡競馬場造成前の水田畦畔・土抗、その下層からは谷地形(自然地形)が確認された。同西端の右京第281次調査では、グラウンド側溝や、同競馬場建造時のコンクリート側溝・素掘り溝が検出されたのみである。

今般の発掘調査に先行して8か所の試掘調査が実施された昨年度の右京第888次調査では、1～3トレンチで旧水田面やピットなどの遺構を確認したが、その北・西側に位置する4～8トレンチでは遺構・遺物の検出は皆無であった。各調査結果から元来谷部・旧河道域や低地水田面での競馬場及至旧校舍造成時の削平・盛土などによる地形変遷を指摘すると共に、今後の調査結果を待ちたいとした。



第3図 調査地平面・断面図



第4図 南壁土層断面図

3. 調査の概要

現地での発掘調査は、昨年度の試掘調査結果を受けて、1～3試掘トレンチを中心とした、旧校舎間の最も攪乱頻度の少ないと想定される空間地に幅4m・東西長62.5mの調査区を設定して、重機により盛土層の掘削除去作業を調査区の西端から東側に向って着手した。

全面にわたって旧校舎建設時の再埋土を除けば、厚さ約20～50cmの淡褐色砂礫土や茶褐色砂礫土が被い、西側約20mは攪乱が夥しく、地山の淡黄褐色粘土層が展開していた。東側は灰色粘質土が広がって、42m地点より約1mの段差でさらに灰色粘質土が横たわる。50m地点付近から約10m間にわたってコンクリート製大型受水槽があり、校舎解体時に合せて解体されて、大きく攪乱され、底面はさらに数m下位で、遺構等は既に消失していた。そのため調査地をさらに東方10m程度延長して掘削を継続した結果、地表下2mで灰色粘質土を確認した。この灰色粘質土から人力による遺構検出作業を開始した。上面からピット列や畝状遺構を検出した。灰色粘質土は10～20cm厚で、マンガンを含んだ淡黄褐色砂質土を被っていた。田畑等の耕作土であり、床土であると判断された。

また、P07付近の高まりは畦畔痕跡であろう。下層には段差をもって3条の側溝が真北方に縦走していた。さらに下位には、古墳時代の包含層である茶褐色系粘質土が堆積していた(第3・4図)。

検出遺構(第5図、図版第1～4)

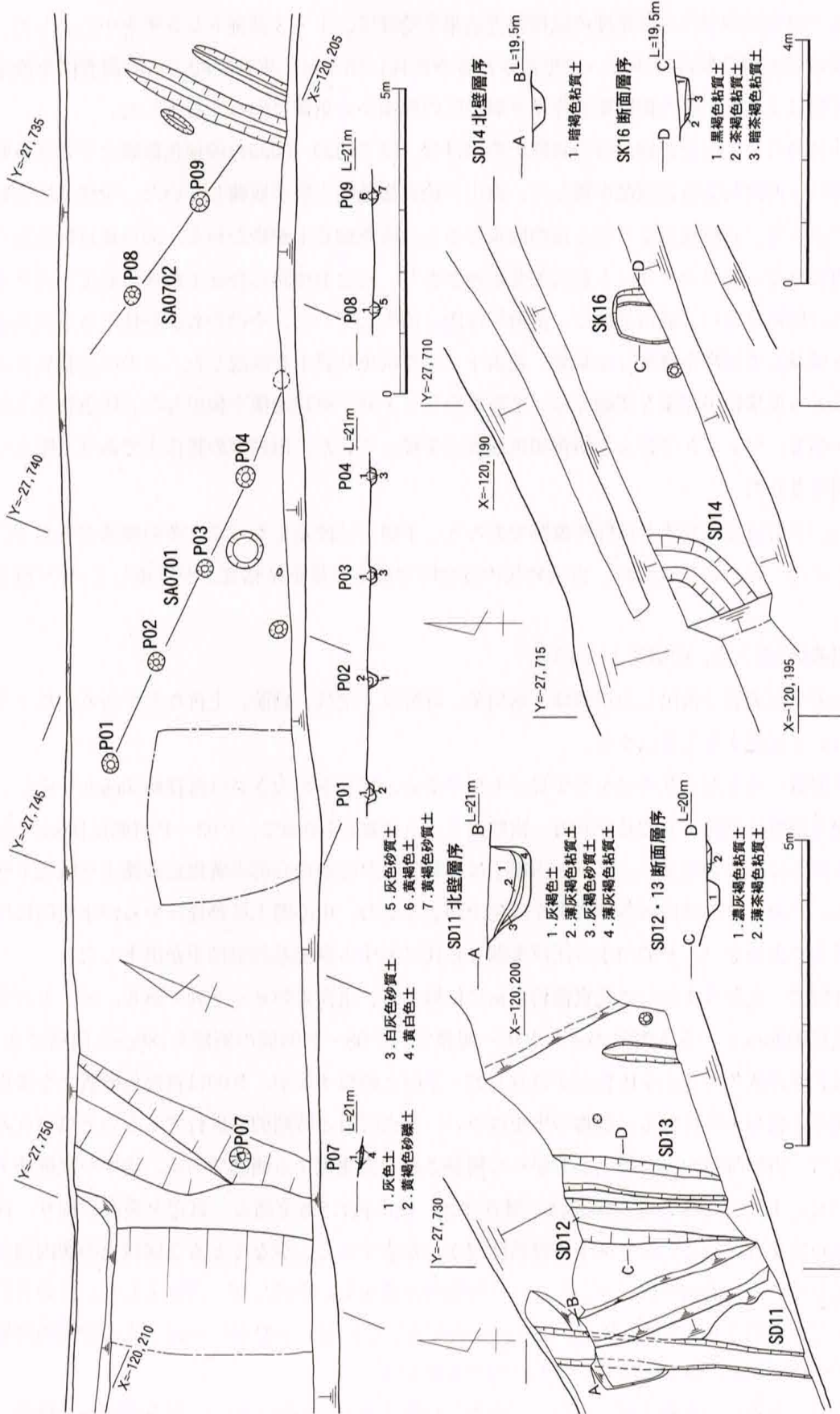
今回の発掘調査で検出した遺構は、水田跡、畦畔痕、杭列、側溝、土抗などである。以下各遺構について記述することにする。

S A0701 若干左上りの列をなすピット列である。ピットの大きさは直径約30cmと一定し、ピット間の距離はP01～P03及びP04～南壁内ピット痕跡が180cmで、P03～P04間は160cmを測る。深さも10～15cmと大差ない。ピット内埋土は、P01・P02が中心部の黄褐色砂礫土を灰色土が取り囲み、P03とP04は白灰色砂質土を灰色土が包み込む。中心埋土に差違はあるが年代的には同一と考えて大過ない。P03内から江戸末期～近代に属する京焼系急須把手が出土した。

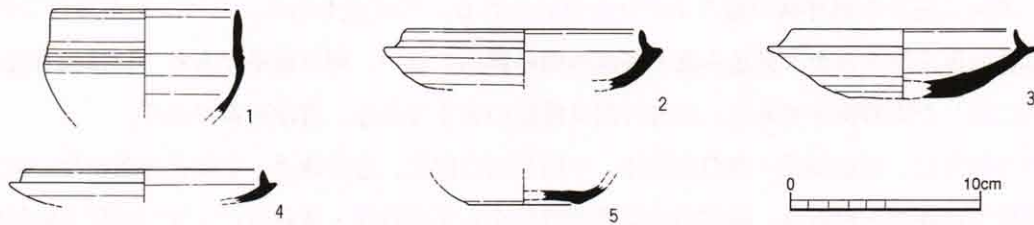
S A0702 前記S A0701の北東側約3mに位置する、東西走のピット列である。ピットの大きさは直径約30cmと、S A0701のそれと同一規模で、P08～P09間の距離も180cmと同様である。埋土はP08が灰色砂質土を灰色土が包みP03・P04と酷似するが、P09は黄褐色砂質土を黄褐色土が囲み、様相を異にする。遺物の出土はない。S A0701と時期的に併行するものと思われる。

S D11 古墳時代の包含層上面を穿って構築された南北走する側溝である。途中一部破壊を被っていた。上面幅65cm、底面幅35cm、深さ28cm、検出長4.5mを測る。東辺を垂直に掘り、西辺は傾斜角度をもたせている。埋土の堆積状況から推察すると、少なくとも3回以上の溝内掘削を繰り返している。溝内南壁寄りから江戸前期の唐津系陶器の小破片が一点出土した。このS D11に伴って東側約1m幅をもって急激に1.2m下がる。この約1m幅間は30cm下位に拳大の河原石を敷きつめていた。畦畔造成時での基礎固めであろう。

S D12 S D11の東側2mに併行して穿たれた溝である。幅50～60cm、深さ約20cm、検出



第5図 検出遺構実測図



第6図 出土遺物実測図

長2.7mを測り、真北方向に縦走する。溝内埋土は濃灰褐色粘質土で、SD11の埋土と酷似する。遺物の出土はない。SD11と年代的に併行する。

SD13 SD12に隣接して穿たれた溝である。幅40~50cm、深さ10cm、検出長2.7mの規模で、真北方向に縦走する。埋土は薄茶褐色粘質土で、遺物を含まない。溝上面に淡黄褐色砂質土が横たわる。層位から近世以前に属する。

SD14 地山面をU字形に掘り下げて構築した溝状遺構で、緩やかに北西側に曲線を描く。西端は旧校舎付属受水槽で消失し、北東側は調査地外に延びる。埋土は暗褐色粘質土である。出土遺物はない。埋土は古墳時代包含層と類似する。幅0.7m、深さ0.2m、検出長1.5mを測る。

SK16 東西幅85cm、深さ20cm、検出南北長80cmの隅丸長方形の土抗で、南側は調査地外へと延びる。土抗内は東辺に沿って10cmの段差を設けている。埋土は上層が黒褐色粘質土で焼土を含み、下層は暗茶褐色粘質土で小片と化した土師器片が2点出土した。中世以前に属する。

上記した各遺構以外にピットやスラッグ塊を埋納した円形土抗、畝状遺構がある。P07は中央に平石を配した柱穴で直径約30cmを測ることからもSA0701と関連すると推定できる。このP07の付近は地山が小高く帯状に高まりを見せ、南・北壁にU字形の溝断面が残存しており、この高まりは近世時の畦畔痕跡と考えられる。また、古墳時代の須恵器・土師器を多く含んだ包含層下から、緩斜面の地山を穿って、ピットや幅1.2m、深さ40cmの溝の残欠部を検出している。

4. 出土遺物(第6図、図版第4-(3))

今回の発掘調査では少なからずの土器類等の遺物が出土した。その多くは古墳時代包含層からである。また土器の大部分は小片と化し、摩滅も夥しい。須恵器・土師器・瓦質土器・中国製輸入陶磁器、緑釉陶器、近世陶磁器、金属製品などある。以下、主要な出土遺物を列挙する。

1~4・6は須恵器である。1は把手付碗の可能性があり、濃灰色を呈し、器壁は薄い。肩部に稚拙な2条の凹線文を施す。2~4は杯身の破片である。口縁部が低く内傾し、器壁も厚くなる。6は高台付け杯身であるが磨耗が夥しい。7~9は土師器類である。7・8は布留式甕の口縁部片で、口縁端部を折り曲げ、器壁も厚い。9は土師器甑の底部片で、器壁が厚くなりつつ、底部穿口部で最大厚となる。穿口部は緩やかに湾曲する。外面に細いハケメ目を施す。10は緑釉陶器碗の口縁部片で、内外両面に色薄い緑釉を施す。焼成堅緻である。京都産であろう。11は磨耗の著しい瓦質羽釜土器片であり、一部ススの付着痕が認められる。12は淡青色を呈した厚手の中国製輸入陶磁器片である。口縁部上端面は口禿で、あるいは受口をもった蓋付の鉢の可能性が

ある。表面に僅かな蓮弁状の盛り上がり認められる。火災痕もある。5は灰釉系皿片である。表面は黄緑色を呈するが、見込み部や底部外面は露胎に近い。瀬戸産系である。13は淡青緑色釉を内外に施した陶器碗片である。底部外面は露胎のままである。唐津産系である。

これら以外に、須恵器甕・壺の体部片、中国製灰白磁片、志野焼系・京焼系陶磁器片、伊万里系磁器片や蹄鉄などがある。総体的には古墳時代から平安時代・鎌倉時代・江戸時代と断続的な使用遺棄年代が想定できる。

5. まとめ

今回の調査では、長岡競馬場造成以前の土抗・溝・ピット列などの遺構を確認したが、長岡京に係わる宅地関連遺構や道路遺構などの検出はなかった。それは、歴代の土地利用による段丘緩斜面の改変の結果である。調査地西側20m間は、既に大きく自然地形が削平され、遺構・遺物の出土が皆無であり、より東側は開削土の再堆積層が横たわっている。既往の調査結果と符合し、昭和初期の長岡競馬場造成によると推定して大過なからう。また東側は、受水槽の部分を除いて、地山面が緩やかな下降線を描いていたものと想定できる。江戸初期段階で、緩斜面を利用し、階段状に平坦地を造成し、畦畔を築造して棚田化を計り、その後長期間にわたり耕作地として使用したと推定される。この段差部が、字「北谷」と字「横山浦」との字界と一致することは注目される。とすれば、今次の調査地での同様な状況が、字「横山浦」すなわち府立乙訓高等学校南側東半部地下に埋没・展開している可能性が高くなる。

(松井忠春)

注 調査参加者は以下のとおりである。

調査補助員：木村悟・黒慶子

整理員：荒川仁佳子

参考文献

山口博「長岡京跡右京第79次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報第3冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

石尾政信「長岡京跡右京第193次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報第20冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

石尾政信「長岡京跡右京第281次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報第27冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

岸岡貴英「長岡京跡右京第888次調査」(『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成18年度)』京都府教育委員会) 2007

圖 版



(1)発掘調査前全景(北西から)



(2)発掘調査前全景(西から)



(3)柵列S A0701・0702
(南西から)



(1) 溝 S D 11(北西から)



(2) 溝 S D 12・13(北西から)



(3) 階段状地形(北東から)



(1) 溝 S D14(南東から)



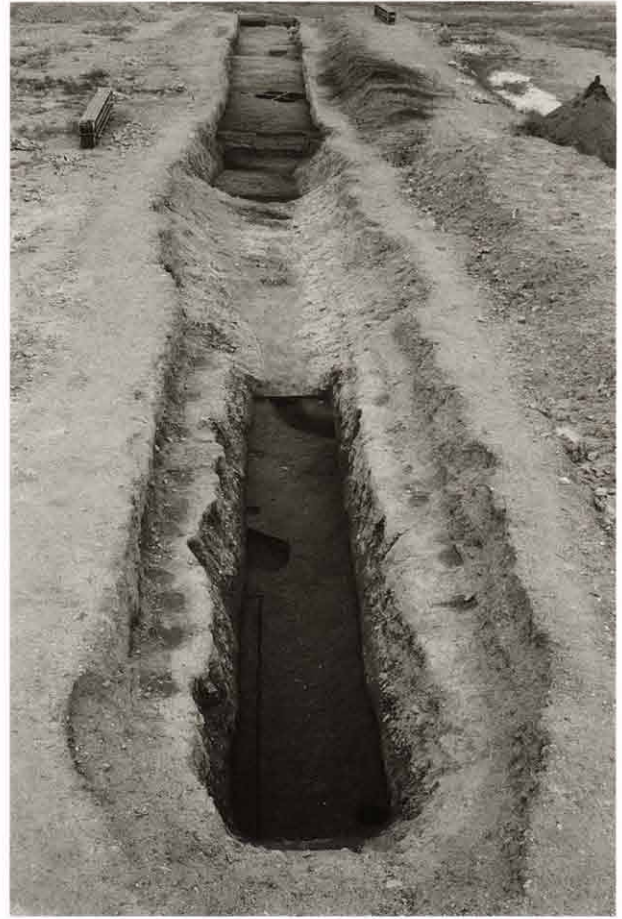
(2) 土坑 S K16(北から)



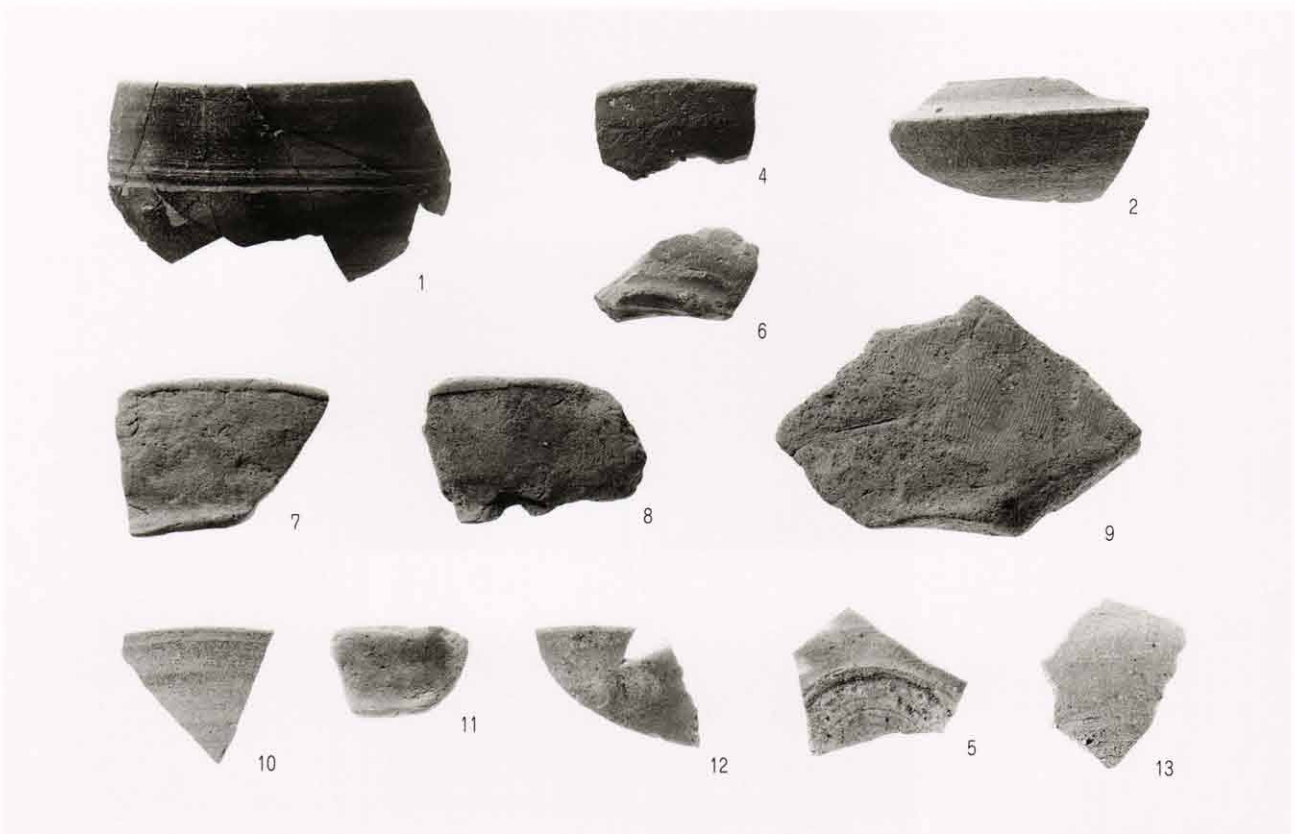
(3) 須恵器片散布状況(南西から)



(1) 調査地全景(南西から)



(2) 調査地全景(北東から)



(3) 出土遺物